➡ 知ってます？市の森林皆伐で市民の財産が失っていること。

白旗山都市環境林ニュース

2024年11月18日(月)　NO.6　発行:札幌の自然を守る会代表梶田清尚　HP:https://midori.kei1.org

白旗山は経済林だけではない

秋元札幌市長、「白旗山都市環境林基本計画」を守れ

～動植物調査なしで森林皆伐する札幌市～

札幌市の秋元克広市長は「ゼロカーボンの実現」のための政策を進めるとしていますが、実はむしろ二酸化炭素を増加させているのです。市民の貴重な財産である「白旗山都市環境林」内の動植物の生態系に関する事前調査もなく、極めて事務的に森林皆伐を強行しています。また宣言にあるゼロカーボンの数値設定もなく、これまで森林12カ所30ヘクタールにわたって感覚的に皆伐を行っています。皆伐現場は誰が見ても無残な姿をさらしたものとなっており、この風景は破壊そのものです。市長は今後もさらに森林を破壊し続けるのでしょう。一体何のための森林破壊なのかとても理解ができません。

なぜ「白旗山都市環境林」なのか

このような行為は、市長が「ゼロカーボンの宣言」を大義にしたことにより森林破壊の開始宣言となったのです。市長が白旗山都市環境林を破壊するほど憎むのはなぜなのでしょうか。皆伐によって森林破壊する理由を、市長にお伺いしたいところです。皆伐を進める部署は、「白旗山は元々林業のための森林で、５０年ごとに皆伐しているがこれまで伐採しなかったのは休止していただけ」と説明していますが、これでは４０年前にあえて「白旗山都市環境林」と命名した経緯を認識しないまま、貴重な森林資源を皆伐していることになります。市長は白旗山について、「林業の森だからゼロカーボンの宣言により皆伐する」との考えのようですが、そのことが市民の貴重な財産となる森林破壊なのでしょうか。

いま進めている皆伐は、間違った方向ですので、とても「ゼロカーボンの実現」にはなりません。むしろ多量の二酸化炭素を大気に放出することを加速させるだけです。これでは宣言のかけ声とまったく違う方向に進み、「カーボンの増加」をもたらすだけです。つまり地球温暖化をむしろ促進しているのです。札幌市が掲げる「ゼロカーボンの実現」にはならず、皆伐により森林破壊が進み二酸化炭素をさらに増加させることになるだけです。

※次ページをご覧ください。

「白旗山都市環境林」と札幌市が命名

札幌市は1982年「緑の基本計画」を策定しており、これに基づき適切な森林管理を通じて森林機能を総合的に高めていくとして1984年に「白旗山都市環境林基本計画」を立案している。

その計画は翌年1985年から実施となり、そのとき旧来の西山造林地から「白旗山都市環境林」に命名された。それまでの白旗山は木材生産主体の経済林であったのが水資源の涵養、大気浄化、動植物の保護・森林レクリエーションなどの公益的機能のある森林となった。さらに節度ある木材生産まで含めた森林のすべての機能を高度に追求する都市林として新たにスタートを切った。

白旗山皆伐4

「白旗山都市環境林」の森づくり

森林破壊がどうしてゼロカーボンなのか

行政の間違ったゼロカーボンの認識や市民の森林破壊を秋元市長は、早急に現場に足を運び自らの目で確認すべきです。降雪前に行かないと、取り返しがつかない大変な事態になってしまいます。そこで本紙では、森林として公益的機能をもつ白旗山を取り上げ、森づくりについて考えてみます。

「白旗山都市環境林」のカラマツ林を通しての皆伐・再造林はあらためて言うまでもないのですが「ゼロカーボンの実現」に的外れなことです。二酸化炭素の削減は必要なことですが、では大都市近郊の森林のあり方はどうあるべきか。札幌市が計画する皆伐・再造林の50年間について、従来の白旗山の森づくりと比較してみます。

森づくり、できる限り時間をかける

白旗山の森づくりは、できる限り時間をかけて先人が植えたカラマツを無駄にしないよう徐々に抜き、空いた場所には自然に生えてきた広葉樹を保護育成し、エゾマツ、トドマツを坪植えするなどして混交化を図っていくことになります。これは裸地を生じさせないようにスムーズに林種の転換を図っていく手法です。もちろんシラカバなどパイオニア植物を除く広葉樹は、カラマツのように初期成長が早くないため炭素の吸収・貯蔵は必ずしも高くなく、多様な樹種によって生物多様性は高まり、それにより土壌構造は発達し、土壌養分が豊富化して生産力は高まり、水源涵養機能が高度化して多様な樹種の根茎により土壌の緊縛力は高まって林地は安定します。

したがって、時間をかけた重層的な移行が必要といえます。

皆伐によってむしろ二酸化炭素が放出

一方では、「皆伐・再造林」は、林地に生えるすべての林木を伐採することであり、既存の林木による炭素の吸収・貯蔵は望めません。また、残された根株と間伐等を行う中で発生する末木枝条（うらきしじょう）に閉じ込められていた炭素はいずれ微生物等によって二酸化炭素となって放出されます。中には萌芽更新もありますが、すぐに植えられたカラマツの育成のために刈り取られます。しかも、いくらカラマツの成長量が大きいからと言っても皆伐・再造林後、じつに40年間「白旗山の森づくり」より材積量が低いのです。40年間というと標準伐期齢（30年）を超えており、この森林にとって、何のための削減だったのかわからなくなります。あとで触れることになる「伐りだされた木材がそれを補って余りある」と言っても果たしてそうなのでしょうか。

それにしても、「白旗山の森づくり」は費用がかさむのは確かです。また、「皆伐・再造林」にしても造林費が工面できなくて、再造林放棄があちこちで横行する始末です。それに業を煮やした政府が、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）が認めている企業間で温室効果ガスの排出削減量を売買できるカーボンクレジットや「森林環境譲与税」を使った「皆伐・再造林」を盛んに奨励しています。この白旗山の皆伐もそれに乗っかった事業なのです。

「皆伐・再造林」の判断は、市の間違いだ

そうであれば、間伐までしっかり終えたところはいっそのこと、択伐などの木材生産作業を止めて放置した場合、炭素の行方はどうなるのか。これまで保護育成してきた広葉樹は、上木の70年を超すカラマツは樹冠がさほど大きくはなく陽光の差し込みも良好なので成長に大きな支障はありません。したがってそのまま生育するであろうし、カラマツも90年、100年持つことは難しいので徐々に衰退します。そしてその間隙を突いて新たな広葉樹が侵入してきます。もちろんクマイザサなどの繁茂による障害やシカの食害が問題になりますが、これらをクリアーできれば立派な広葉樹林になります。

この「放置」と「皆伐・再造林」を比べた場合、この森における炭素の貯留は、やはり再造林から25年間は「放置」のほうが優っています。札幌市は「放置」よりも「皆伐・再造林」のほうが、優れていると間違った判断をしているのです。

だがそうした択伐や樹下植が進まない林分についても、人工林由来だからと言って、決して森林劣化が進むわけでありません　※この続きは、次号になります。

追記 ▶「皆伐」白旗山の植樹に着手、札幌市とクワザワHDが連携協定を結んだ―道新11月15日付に掲載された。2029年度までの5年間、皆伐した1haについて植樹するという(現在の皆伐は30ha)。秋元市長は今後も順次、植樹、伐採のサイクルを繰り返すという。つまり森林破壊は今後も続けるということなのだ。